略系図

- 桐壺帝
  - 源氏
    - 故常陸のみこ
      - 末摘花
    - 左大臣
      - 夕顔
        - 女（玉鬘）
      - 頭中将
    - 大宮
    - 後妻
      - 兵部大輔
        - 大輔の乳母
      - 左衛門の乳母
      - 筑前守
    - 乳母
      - 侍従
    - 故尼君
      - 故姫君
        - 紫君
    - 空蟬
    - 伊予の介
      - 軒端荻
    - 故先妻

一 夕顔は源氏の通つた女性。源氏が自分の別荘につれだしたところ、はからずも物の怪におそわれて死んでしまつた次第が夕顔巻にのべられている。

二 源氏物語大成では底本をのぞく青表紙諸本・河内本には「おくれしほどのここち」とある。（以下、かゝげる校異はすべて源氏物語大成に拠る。一々ことわらない。）

三 葵上・六条御息所など源氏の通つている女性をさす。

四 気取つて思慮深くふるまうという点での、互にはりあつていらつしやる女性方の御様子に対比して。

五 夕顔の様子。「うちとけたりし」が「（源氏ニトツテハ）おもほえ給ふ」の主語。

六 「おもほえ」は「おもはえ」の転。「え」は助動詞「る」の古形「ゆ」の連用形。自発の意。

七 教養の香の高い趣味性・風情をもつていることをいう。

八 ほとんど。

九 めずらしくなさすぎて興のないことだ。

一〇 たとえようもなくあたたかみの欠けたきまじめさなどが、極端に身の程をわきまえない様子で。

思へども、なほ飽かざりし夕顔の露におくれし心地を、年月経れど思し忘れず、こゝもかしこも、うちとけぬ限の、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう、恋しくおもほえ給ふ。いかで、ことぐしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つゝましき事なからむ、見つけてしがなと、こりずまに思し渡れば、すこしゆゑづきて聞ゆるわたりは、御耳とゞめ給はぬ隈なきに、さてもやと思し寄るばかりのけはひあるあたりにこそ、一行をもほのめかし給ふめるに、靡き聞えずもて離れたるは、をさをさあるまじきぞ、いと目馴れたるや。つれなう心強きは、たとしへなう情後るゝまめやかさなど、あまりものの程